「さよなら原発福井県集会2016 in 小浜」にご参加のみなさんへ

忘れない　フクシマ　守りたい　いのちと　びわ湖

原発立地県という困難な条件の中で脱原発を求めて奮闘されている福井県民の方々に深く敬意を表します。福井県に隣接し、福井原発で事故が起これば、大変な被害を受ける滋賀県民も、福島原発事故後、粘り強く脱原発運動を進めています。

さて、福島第一原発事故から５年が経ちましたが、事故原因の究明は進まず、事故の収束の見通しも立っていません。今も大気中に放射性物質が放出され続け、高濃度の汚染水が海に垂れ流し状態です。放出される放射性物質は、地球規模で生活環境を危険にさらしています。自宅に戻れない多くの避難者や被災者は、経済的・身体的に追い詰められています。事故の収束作業に従事する労働者は、劣悪な環境の下で、被ばくの心配をしながら労働を強いられています。被災地では、甲状腺がんが見つかった子どもたちや健康異常を訴える人々の数は増え続けています。今後も被害がいつまで、どこまで広がるか予測できず、多くの人達が未来の見えない不安の中に置かれています。

昨年8月11日に鹿児島県の九州電力川内原発１号機の再稼働が、大多数の国民の反対を押し切って強行され、同年10月には2号機も稼働させました。また、愛媛県の四国電力伊方原発3号機でも稼働を計画しています。伊方原発3号機について、伊方町長は昨年10月22日、再稼働に同意する考えを伝え、愛媛県知事も同月26日、再稼働に同意しました。

今年1月に入って関西電力は、非常に危険なプルサーマル発電で、築30年以上という老朽化原発である福井県の高浜３号機の再稼働を強行し、2月26日、高浜4号機も再稼働させました。しかし、４号機では、再稼働直前に放射性物質を含む汚染水が漏れ、再稼働直後の29日に電気系統の異常で緊急停止しました。再稼働に反対する大多数の国民を無視し、地元住民の声もまともに聞かない暴挙に対し、各地市民団体などが「住民の安全と不安を置き去りにするな」「福島原発事故は収束してない」と抗議の声をあげました。滋賀県の一部は高浜・大飯原発から30キロ圏内にあり、重大事故が起きれば、避難はほとんど不可能です。さらに、びわ湖の湖底には放射性物質が溜まり、長期にわたって関西の貴重な水源が失われ、土壌も広範に汚染されるため、西日本も安心して住めなくなります。これに対して、3月9日に大津地裁で画期的な高浜原発再稼働禁止仮処分決定が出され、３号機も運転を停止しました。滋賀県知事も、現状では高浜原発の再稼働を容認できないとしていますが、今後とも再稼働反対を貫くよう求めます。

それにもかかわらず、安倍政権は、新エネルギー基本計画で原発をベースロード電源に位置付け、原発再稼働と原発輸出、そして新たな原発建設を進めています。これは「同じ苦しみを誰にも味わって欲しくない」という福島の被災者の想いを踏みにじる行為です。原発推進勢力は「原発がないと電気代が上がる」と言いますが、原発のコスト高が明らかになり、そうした口実も破たんしました。もはや問答無用で強行突破する構えです。関西電力は原発の安全性はそっちのけで、原発再稼働の遅れを理由に電気料金を再度値上げしました。

びわこ集会に集う私たちは、福島原発事故を忘れることなく、福井県民と共に、原発のない社会をつくりあげる決意を新たにしています。圧倒的多数の原発ゼロを求める国民世論によって原発推進勢力を包囲、孤立させ、自治体とも手を取り合って、高浜・大飯原発再稼働を許さず、放射能からびわ湖を守り、滋賀県民と福井県民のいのちとくらしを守りぬきましょう。

2016年3月13日

「原発のない社会へ　2016びわこ集会」参加者一同